

飾りの東西

囃子などの人形に加え、たくさんの雛道具が幾 段にも並べられた、雛段の光景が思い浮かび 雛まつりといえば、内裏雛に三人官女、五人

を与え、「段飾り」が完成したと考えられてい まったく同じで、婚礼道具の縮小版ともいえる 名家では、 は、町人の女子が武家の奥向きに奉公すること の東京) で完成したと言われています。 江戸で 華やかな武家の雛飾りにならって、 な雛道具を加えた飾り方が江戸の町人に影響 豪華な雛道具が見られます。このような華やか の雛飾りを拝見することが許されました。大 がありましたが、雛の節供には、近親者も屋敷 この豪華な「段飾り」は、江戸時代の終わり、 姫君の婚礼道具と文様も製作技法も 江戸 (現在

した。 調理道具が加えられます。残念ながら、現代 江戸ではまず見られないおくどさん(台所)や 雛が住まう御殿を最上段に置くのが一般的で 西地方)ではどのような飾り方が主流だったの ではこの飾り方はほとんど見られなくなりま した。雛段は二段程度、豪華な雛道具は少なく でしょう。上方では「御殿飾り」、つまり内裏 それでは京都や大坂といった上方(現在の関



中村富子氏寄贈 御殿飾り雛

京都国立博物館蔵

記されています。こんなところにも、実質的と りも質素で洗練されていないように見えるけ 世風俗志』) によれば、上方の雛飾りは江戸よ で暮らした喜田川守貞の『守貞漫稿』(別名『近 言われる上方の教育方針が見え隠れするよう れど、これは女子に家事を習わせるためだ、と 江戸時代の終わりに上方に生まれ、 後に江戸

においても次第に地域性が失われていったこ れません。交通や通信の発達により、雛飾り とがうかがえます。 れ、上方の特色であった台所や調理道具が見ら 飾り雛です。江戸風にたくさんの雛道具が飾ら 本年展示するのは、大正時代の小ぶりな御殿

男雛と女雛

右と左の不思議

うです。 題になりますが、左右両説とも根拠が あり、どちらが正しいとは言えないよ 男雛と女雛の正しい並べ方はよく話

流です。 西地方では、現在でもこの並べ方が主 ります。そのため、伝統を重んじる関 ば、向かって右は男雛、左は女雛とな ですから、伝統的な宮中の席次に従え 内裏雛は、天皇と皇后の姿がお手本

に広まったと言われています。 洋式の儀礼が導入されると、それに 撮影された写真を参考に、東京の人形 となります。昭和天皇の即位式の際に 従えば、向かって右は女雛、左は男雛 倣って男女の占める位置が逆になりま に端を発し、この並べ方が関東を中心 業界が雛人形の左右を置き換えたこと した。そのため、現在の皇室の規定に しかし、明治時代を迎え、宮中に西



次郎左衛門雛じろうざえもんびな

京都の人形師・雛屋次郎左衛門がつくり始めたとさ れる、丸顔に引目・かぎ鼻・おちょぼ口のおっとり した面貌の雛人形。18世紀後半には製作されていた ようです。公家の子女らが入寺する門跡尼寺や、大 名家に伝えられた作例もあります。



古今雛こきんびな

江戸の名工、二代目・原舟月が完成したとされる、 現在の雛人形の原形。安永年間 (1772~81) からつく られ始め、江戸での流行を受けて上方でも製作され るようになりました。実際の公家装束にならうもの の、女雛の袖口に刺繍を加えるなど、より豪華に仕 立てられています。主に町方で飾られました。



有職雛ゆうそくびな

装束に明るい公家の監修のもと、公家や武家のため に製作された特別注文の雛人形。有職とは、宮中に まつわる伝統的な儀式や行事にともなう知識をいい ます。髪型・装束の色目・文様など、忠実に公家の





親生 たちびな

三月三日に人形を飾る雛まつりの始まりとして、 人間のけがれを木や紙でできた人形に移し、

川や海へ流す祓いの行事があります。 自立できない立雛は、けがれを移す 人形から発展したと考えられ、

飾ることを目的としていなかった 初期の形式を伝えています。





頭 代 0 ととも つくり にさまざまに変化 手の動 3 きなど な 細 1

部

てきた雛 いにご注

人形 目

寛永雛 かんえいびな

江戸時代前期 (17世紀) の古風な雛人形。高さは 10cm ほどで、坐雛の初期の例のひとつです。男 雛は頭と冠を一緒につくり、髪の毛と冠は墨塗 り。女雛は両手を開き手先をつくらず、小袖を



江戸時代

[寛永年間] $(1624 \sim 1644)$ [元禄年間] $(1688 \sim 1704)$ [享保年間] $(1716 \sim 1736)$ [安永年間] $(1772 \sim 81)$

製作年代とは必ずし雛人形の名前につ

古式享保雛(元禄雛) [[[んろくびな)

寛永雛よりもやや大きな雛人形。男雛のつくり は寛永雛とほとんど変わりませんが、女雛には

手先がつき、装束も十二単風の 襲装束になります。





明治時代

享保雛きょうほびな

江戸時代中期 (18世紀) に町方で大流行 し、その後も長くつくり続けられた雛 人形。面長で端正な顔立ちで、 50cm にもおよぶ大きなものも あります。毛髪は毛植えになり、 公家装束を模した金襴の装束を 身に着けます。



嵯峨人形 唐子 京都国立博物館蔵

嵯峨人形きがにんぎょう

木彫りを基体に、衣裳の文様を胡粉で厚く盛り上げ、極彩色を施した人形。年月の経過もあって色調は重く沈んでいますが、かわいらしいだけではない深遠な表情と相まって、独特な魅力をたたえています。江戸時代を通じて製作されましたが、子どもの姿をうつした裸嵯峨、うなずくように首を振るからくりが仕組まれた首振り嵯峨が、初期のものと考えられています。

考えられています。さまざまな人形が誕生しました。さまざまな人形が誕生しました。

京人形いろ5ろ



御所人形 見立て桶取 京都国立博物館蔵

御所人形ごしょにんぎょう

木彫りに胡粉を塗り重ねて磨き上げ、三頭身のあどけない幼児の姿を写した人形。明治時代以前には、その白く美しい肌から白菊、あるいは白肉、頭の大きなところから頭大、扱った人形間屋の名前から伊豆蔵人形などと呼ばれていました。初期には子どものあどけない仕種をうつすのみでしたが、やがて組み合わせて物語や場面を表現するようになりました。



御所人形 春駒持ち 京都国立博物館蔵





衣裳人形いしょうにんぎょう

衣裳をまとった胴体に、頭部や手先を 加えた形式の人形。子どものかわいら しいしぐさを写したものや、婦女・遊 女・若衆などの風俗を写した浮世人形、 能の舞台姿そのままの能人形などがあ ります。



衣裳人形 婦女立姿 入江波光コレクション・入江酉一郎氏寄贈 京都国立博物館蔵

■ 京都国立博物館

京都市東山区茶屋町 527 075-525-2473 (テレホンサービス) https://www.kyohaku.go.jp/